大浦

大浦地区は山田湾の南側に面した船越半島の入り江に沿う、静かな漁師町。ホタテガイやワカメの養殖のほか、天然の漁場に恵まれ、アワビやウニの漁も盛んだ。防潮堤を乗り越えた高さ9メートルに及ぶ津波は、大切な漁船や漁具、住み慣れた家々を押し流してがれきの山を築き、港を見下ろす小高い場所に立つ大浦漁村センターの手前まで迫った。大浦の集落から南に2キロ余り、反対側の外洋に面する小谷鳥海岸には、さらに巨大な津波が襲来した。防潮堤と防潮林を一気になぎ倒して山間の奥深くまで浸水し、津波の先端が到達した遡上高は約25メートルとされる。

死者・行方不明者	38人
震災前の人口	921人
全半壊家屋	117戸
被災家屋の割合	37%

地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

二度と犠牲者出さぬよう

【大浦】 1

山田中学校2年［当時・大浦小学校5年］小林夏希

日本の国は、あのほんの一瞬の出来事で真逆の世界に変わってしまいました。

3月11日、こんな大きな地震があるとは知らずに私は過ごしていました。あともう少しで6年生だから、いろいろがんばらなければならないと毎日思いながら普通に過ごしていました。その日はちょうど学校が5時間授業、しかも短縮授業だったので女子3人でゲームをして遊ぶ約束をしていました。5時間目と帰りの会が終わって、すごく楽しみにしていた遊びの時間。私たちは急いで2階の教室から、1階の玄関まで走っていきました。そして靴をはき外に出ようとした瞬間、ゴォーという音がしました。トラックが来たのだろうと一瞬思いました。けれど、そのすぐ後にすごく大きな揺れを感じました。最初はそれほど大きいというほどではありませんでした。それから男子も来て、5年生の全員5人は、すごく大きな揺れで立っていることもできず、ランドセルを頭にかぶせ、玄関の所にみんなでかたまっていました。そうすると、職員室にいた男の先生が来てくださいました。

あの、大きな、大きな揺れは長い時間続きました。私はすごく怖くて、怖くて号泣していました。そして、みんなでなぐさめ合いながら、教室に戻りました。すると、複式学級で5年生と一緒の4年生と担任の先生がいました。4年生7人はみんなで机を近づけ、その下に隠れていました。怖くて泣いている女子もいました。私たちも同じようにして隠れました。その後何分かたつと、2階のホールに避難している人たちが、「津波が来たー」とすごく大きな声で叫んでいました。先生は「怖い人は見にいかない方がいいよ」と言っていました。後で見に行くと、前までのあのきれいな大浦ではなくなっていました。道路には、製材所や「川秀」（水産加工会社）の建物の一部、小屋などいろんながれきが堤防を乗り越えて散乱していました。

あの一瞬の出来事で、亡くなった人々、家を失った人々がたくさんいます。私の所は、家も家族も全員無事でした。きっと亡くなった祖父が守ってくれたのでしょう。幸せな事です。

今でも地震は毎日のように起こっています。また、いつどうなるか分かりません。そんなの誰にも分からないのです。また家族がバラバラになるかもしれません。もしこんな事がこれから起こっても、もう二度とこんなに多くの犠牲者を出したくありません。

心も体も強くなる

【大浦】 2

山田中学校1年 佐々木智輝

あれから、1ヵ月以上たったある日、母は遺体で見つかりました。悲しかったけど見つかって

本当によかったと思いました。

3月11日午後2時46分。僕たちは帰りの会の最中だった。その時だ。「ゴゴゴゴ」と耳に伝わってくるかすかな音がした。「地震だ」。みんな、一斉に机の下にかくれ、収まるのをまった。でも、収まる気配はなかった。

揺れは強く、学校が壊れないようにと、自分は祈っていた。やっと大きな地震は収まり、担任の先生が来る間も余震が続く。担任の先生が来た。その後に1階にいた先生や、低学年の生徒たちも2階に集まって来た。ラジオで先生が地震の情報を聞いている。

ラジオから聞こえた言葉に、自分は恐怖を感じてしまった。津波警報が発表された。みんながざわめきはじめた。僕は家族や自分の家のことなど心配になってきた。先生は、みんなの家族が働く場所は海の近くかどうか聞き始めた。僕の父は大工で、母は看護師だ。そして2人とも海から遠くはない場所で働いていた。僕は心配でならなかった。

先生は廊下に出て、校長先生たちと話していた。

「家はだいじょうぶだろうか」「家族はだいじょうぶだろうか」

こんなことを話しながら心配していた時のことだ。津波が来たのだ。先生が最初に津波に気づいた。みんなは窓の近くに集まってその光景を見た。

この世のものではなかった。家や漁船が波に乗って流されている。津波は家や人などあらゆるものをうばっていった。

その日、僕たちは学校に泊まった。僕は、心の中がもやもやしていた。みんなもそうだったと思う。毛布をかぶって余震にたえながら夜をすごした。その時、みんながお互いに協力し合っていることがわかった。学校に避難しに来た人たちは家族や近くの人に自分の毛布をかけてやっていた。暖房もなく寒い時なのに、自分は毛布を遠慮して他の人に渡している人たちがたくさんいた。

次の朝の食事は、おにぎりと非常食のクラッカーだった。おにぎりは、避難してきたお母さん方が作ってくださった。それを見て僕は心がいたんだ。家や家族が心配なとき、自分たちのためにおにぎりをにぎってくださった気持ちを、僕は忘れられない。

3月12日、朝おきたあと、先生に集められて手伝いをした。水くみだった。校庭の近くの川の水をバケツリレーのように渡し、歩いて水を集めた。その水は、トイレで流すために使った。僕は、水を運んでいた。でも水をこぼしてしまってふいていたら、先生に「無理するな」と言われた。僕は、その時、人の役に立とうと思ってやっていたが、はりきりすぎて役に立てなくてくやしかった。朝ごはんを食べたあと、父が迎えに来てくれた。道路は危なかったので山道を通って家に帰った。

おばあちゃんは僕の顔を見るなり、「心配だった」と言った。お昼前に僕は、姉と2人して被害の状況を見てまわった。僕が思ったこともないような僕たちの村を姉と見てまわった。電柱が倒れていたり、家がもとの所から動いていたり、ひどい姿だった。

実は僕は何より心配だったことがあった。

「お母さんはどうしただろう」

僕が学校から帰っても、母は帰って来なかったからだ。母は看護師だったので、避難所で手伝いでもしているのだろうと信じていたけれど、帰っては来なかった。

1カ月ほどしたある日。母は、がれきの下で焼けただれた姿で見つかった。ＤＮＡ鑑定で母と確認されたそうだ。僕は母の姿を見ていない。

僕は、母にいつもたよってばかりだったので、がんばっていけるか心配だ。でも僕は、協力するということをこの震災で学んだ。姉は大学生になり家を離れ、母は天国へ旅だった。僕は人にたよるだけでなくて、これから祖母や父を自分が支えていけるように、がんばっていきたいと思っている。

中学校に入学して僕は柔道部に入部した。

心も体も鍛えて強い人になる。

「やまだの作文」第40集

気付いたら屋根の上に

【大浦】 3

大浦簡易郵便局長　阿部裕徳（52歳）

あの日は、いつもと変わらず局舎で事務を取っていました。午後2時46分、今まで感じたことのない縦揺れの大きな地震に見舞われました。実際は、数分間だったのでしょうが、随分と長く感じました。まさか、あのような巨大な津波がやって来るとは思わず、同居していた母とのんびりと構えていましたが、母にせっつかれ叔母の家まで車で避難しました。私は郵便局を運営している以上、規則で局舎に戻らなければならず、母を置いて局舎のある自宅に戻りました。

停電により電気も携帯もつながらない状態で、唯一の情報収集手段は車のラジオでした。私は車庫に車を入れ、家の中にいたのですが、ラジオを聞こうと外に出ようとしたその瞬間、玄関の向こう側にさざ波が見えたのです。玄関の外に出た私は、あっという間に津波に飲み込まれ、気が付いた時には母屋と離れのつなぎ目の屋根の上まで流されていました。

今思うと、玄関の扉が偶然にも開いていたこと、自分の靴に履き替えようと思わずに、その場にあった長靴で外に出たことなど、偶然がいくつも重なり、一命を取り止めたのです。けがは、

両手と側頭部の裂傷だけで済みました。第2波が来る前に屋根の上に登り、裏側から逃げたこともよかったのだと思います。もし、玄関が開いていなかったら、もし、外へ出るのが一歩遅かったら、確実に家の中で死んでいたでしょう。津波は2階の床から1・5㍍の高さまで達した痕跡がありました。

この震災で、東北地方の沿岸は、甚大な被害を受けました。亡くなられた方は2万人弱、いまだに行方不明の方も数千人と聞いております。私たちは今、この大津波でこうむった未曾有の被害を後世に語り継がねばならない使命があります。復興の兆しはいまだに見えません。これから、国政、地方行政、私たち被災者が三位一体となって、未来を築いていかねばなりません。

母の教訓が役立った

【大浦】 4

小林タミ子（74歳）

あの日、私は娘と体の悪い叔母の見舞いに行き、帰宅したばかりでした。夫は体調を崩し、家で休んでおりました。昼ごはんを食べ、洗い物をし、お茶を飲もうと座った時、地震が来たのです。地鳴りに驚き、今まで体験したことのない揺れに、慌てて外に飛び出しました。電信柱がぐらぐらと倒れそうに揺れ、家も壊れるんじゃないかと思うほどでした。

「絶対に津波が来る」。私は大槌町吉里吉里（きりきり）の生まれで、実家は海のすぐ近くにあります。母が昭和8年の津波に遭い、大変な思いをした体験を幼いころから聞かされ、家族にも「津波が来たら逃げろ」と言い聞かせてきました。したがって、常に大事なものはかばんに詰め、身近に置いてありました。

「津波が来るから逃げなきゃ」。揺れが収まるとすぐ、常に玄関近くに置いてあった物（防寒着、防災リュック、自分の貴重品）を娘の車に積み込みました。防波堤があるから大丈夫という夫を急き立て、私と娘は車で大浦漁村センターへ向かい、夫は仕事用の軽トラックで自宅より1段上の細い道路に別々に逃げました。

漁村センターの広場に行くと、やはり何人かが車で避難しておりました。寒いので車の中にいましたが、携帯もつながらず、車も余震でぐらぐら揺れて怖いので外に出て、数人の人たちと海の様子を見ていました。

灯台の所まで波が来た時、ここも危ないと思い、さらに漁村センター上の広場まで駆け上がりました。怖さから足が上がらず、最後には腰が抜けたようにはって逃げました。娘は漁村センターに止めた車が流されると思い、取りに戻ろうとしましたが、消防団員に引き止められました。漁村センターの手前で波は止まりましたが、あんな高い防波堤の上を大型漁船や車、家が軽々と流れていくさまは、とても現実の出来事とは思えませんでした。

夫の安否が気になり、皆に見かけなかったか聞きながら上の道路を歩いていくと、山道を引っ

張り上げてもらい、無事だった夫に対面できました。「小林の家は防波堤の水門から海に流されていったっけよ」と言われても信じられず、とりあえず下りていってみました。自宅は跡形もなく、がれきの山でした。ぼうぜんとしたまま、上の道路に戻りました。そこで親戚の方に声を掛けてもらい、夫の体調も思わしくないことから避難所に行かず、親戚の家にしばらくお世話になりました。

その日は、5世帯くらいの方々と一緒になりました。電気もなくろうそくをともし、こたつに湯たんぽを2、3個入れ、10人ほどで肩を寄せ合って一夜を過ごしました。余震も続き、怖くて眠れませんでした。食事も、その方の保存食のおかげで温かいものを頂きました。あそこで声を掛けてもらえなかったら、あの夜から無事でいられたかどうか分かりません。あのころお世話になった方々、助けてくれた方々には感謝してもし切れません。ありがとうございました。

津波の恐ろしさは散々聞かされて育ちましたが、体験してみると想像以上の怖さで、まるで夢のような感じでした。せめて命が助かったこと、防災用品を持って逃げられたことは母からの教訓のたまものです。今後も津波の恐ろしさを皆に伝え、防災に役立つようにしたいです。

大津波、船を避難させる

【大浦】 5

野田　實（73歳）

その時、私は浜にある倉庫の薪ストーブで一人暖をとっていた。地震は3分ほど続き、強烈な揺れだった。すぐさまストーブに水をかけ、外に出た。電信柱が大きく揺れている中、すぐ上にある自宅に駆け上がり、ただごとではないことを妻と確認する。

津波の警戒のため船を出そうと防寒着、食料（食パン5枚、あめ、りんご）を妻から受け取り、海岸まで下がった。町の防災無線で3メートルの津波警報が発令されたと放送された。船を出すスタンバイはできていたが、機関士の弟がまだ船に来ず待機する。

昔からの言い伝えで津波の時は潮が大きく引くと聞いていたので、海面を注意して観察していたが、その気配はなかった。大沢地区の方を見ると、船が何艘も沖に向けて避難していくので、早く出なければと焦りが募る。

3時5分ごろ、弟が来たので急いで船を出す。青灯台防波堤先を曲がる時、海底の泥が数カ所から湧き上ってきていたので潮が引いていく現象かと思い、タライ島、立神岩周辺を注視していたが、変化は見られなかった。まだ大丈夫だと思い、慌てることなく普通速力で進んでいた。沖ノ沢付近にかかった時、大沢明神を眺めていたら、松島けだ（海域）から波が盛り上がり、灯台

をのみ込み白くなって入ってきたのが見えた。これでは沖出しが困難かと一時思ったが、湾口に目をやると、中央より大浦けだの方が波がないようなので、そちら側から外海に出ようと舵を切り、全速力で機械を回した。しかし、船は進まず、引き戻される感じであった。

少しずつ何とか進んで大沢明神横にかかったころ、今度は引き潮に乗ったのか、20ノットぐらいの速度で外海に出ることができた。厳密にいえば引き潮で出されたようなものだ。

3時半ごろ、五丁目付近の沖まで進み、漂泊待機することとした。その場所からは織笠地区や山田地区が見えた。各地区からはそれぞれ煙が上がり、火災が起きているのが見えたが、大浦地区は陰になっていて様子が分からず、いったいどうなっているのか心配であった。

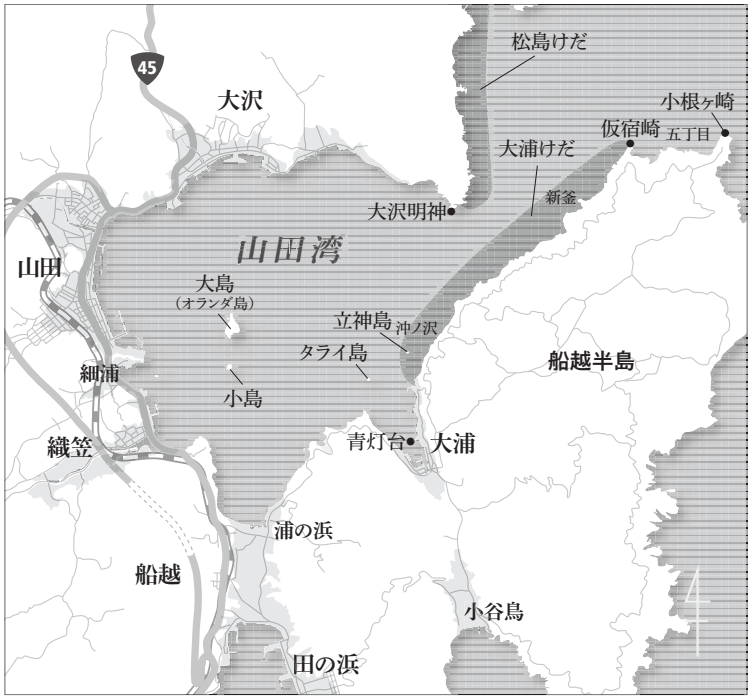
携帯電話、無線局とも連絡が取れなかったが、ただ一つ船間利用の無線機の一部で湾内待機の大杉丸と交信できた。その際、大浦地区では火災が起きていないと確認し安心する。

弟と2人でブリッジに上がり、流れてくる養殖いかだや家屋、流木をよけながら見張っていた。周囲では海面の上下は感じなかったが、魚群探知機で2～3メートル上下しているのが確認できた。また、余震のためか小根ケ崎の岩が土煙を上げ、大音響と共に崩れ落ちるのが見えた。

夕方になり寒さも増してきた。空腹で立ち通しも大変になってくるので錨泊をしようと考えたが、流木等の漂流物に当たって船が壊れてもいけないと思い、湾内の退避船と合流することとし、漂流物に注意しながらスローで湾内に向かった。

湾口に入ると、山田地区で火災が広範囲で起こっていることがはっきりと確認できた。空が赤く染まり、時々車やガスボンベ等が爆発する音が何カ所からも起こっており、この世のものとは思えなかった。湾内には30隻ほどの退避船がいて、その光景を見守るしかなかった。

翌12日、夜明けの海は一面の漂流物で操船もままならない様子だったが、無風状態でありスロー航行、または停止しては静かに進み、青灯台に向けて船を走らせ、潮の上下や周りの様子を見た。まだ1メートルくらいの潮の変化があるので着岸は困難だった。



地図内の■は津波の浸水範囲

大浦地区でも多くの船が流された様子なので、被害状況の調査や捜索等に健在の船が必要と思い、組合の監視船が新釜付近で漂流していたのが見えたので曳航することとしたが、漂流物が多数あり困難を極めた。大浦まで曳き、風が多少出てきたので監視船は錨をした。大浦港に近づき見渡したが、海岸に人影は見えず、空腹は頂点に達していた。

青灯台を越えていつも船を着岸している所まで行けば、家の者が気付いて何とかなるのではと思い、何回も旋回したが陸からの反応はなかった。それでも気付いてほしい一心でまた旋回する。何回目かの旋回でやっと長男が岸壁に現れ、手を振って合図した。すぐに接岸し状況、家族の安否を確認した。長男は「全員無事だから安心しろ」と言い、おにぎりを手渡してくれた。自分の目で被害を確認したかったが、堤防の陰で陸の状況は分からなかったし、またいつ津波が来るか分からない状況なので、すぐまた離岸した。

夕方になっても潮の上下は続き接岸はできず、組合の荷受場前に定置網の土俵網が浮いていたので、それに係船して一晩過ごすこととなった。翌13日午前7時ごろには潮位の変化が収まり、やっと接岸できた。先に上陸した弟が「とんでもねー」と何度も発する。私も船から上がった。堤防のアルミ門をくぐった瞬間、倉庫が二つに折れて山側に寄せられ、周りの家々もなく、漁具も流され、電柱も倒れ、あらゆるものが散乱した変わり果てた漁村の姿が目に入った。目の前の光景を信じることができず、ただぼうぜんとしていた。

10時ごろ、海上自衛隊の方々がボートで駆け付けてくださり、対策本部の所在を聞かれた。今まで大浦地区は孤立していたこと、妻は炊き出しで家におらず、船が何度旋回しても気付いてくれなかったことをやっと理解した。私は運よく助かったが、船を沖に避難させようとしたが間に合わず不幸にも津波の犠牲になった仲間たちの話を聞くにつけ、船を守りたいという漁師の気持ちが痛いほど分かり、胸が痛んだ。私の行動が正しかったのかどうか、今でも分からない。しかし、また地震が来ても相棒の「稲荷丸」を助けようとして浜に下がるだろう。

何も持たず、すぐに高所へ

【大浦】 6

山﨑卓三（85歳）

あの日は、実益と趣味を兼ねた、ホタテガイ養殖の沖作業を終わろうとして、老妻と2人で頑張っていた。俺は愛船聡栄丸の船中におり、家内は岩壁で陸揚げした養殖資材の整理整頓をしていた。俺は、明日、数万余にも及ぶ稚貝を養殖施設の何番枠の何番へ、どうしたら効率よく、迅速に垂下の作業を行えるだろうかと思案の最中であった。

船中で大津波に遭遇するなんて夢にも考えていなかった。平成18年度、地域の防災会議の資料で、今後30年以内に宮城県北部の沖合を震源とする地震が99％の確率で発生するという予測があった。しかし、30年を経ずして東日本大震災という大天災が起き、世界でも例を見ない津波に

よる原発事故を経験した。その恐怖がわが県の産業にも大きく影を落している。

「海の上でも地震が分かるものでしょうか」とよく聞かれる。よく分かるものだ。突然の大激震に俺は驚き、とっさに岸壁上の家内を見ると、どうすることもできず、岸壁にへばりついている。俺は船中に立っていることもできず、船縁にしっかりとつかまっているだけだった。揺れ動く船中から、何の気なしに海底を見ると、何と、今まで全く見たことのない異常現象が起きていた。海底が真っ黒になってもうもうと湧き上がり、沖の方へ移動している。目の錯覚かと見直しても同じであった。これは駄目だ、大津波が来ると直感し、岸壁上の家内に大声で叫んだ。「婆さん、駄目だ！　津波が来る。早く逃げろ」。俺は何とか、婆さんに船から引っ張られて陸に上がった。

事故に遭って以来、足が悪いので耕運機を運転して岸壁から防潮堤の門扉の方へと向かう。消防団の誘導で道路に進み、明治、昭和8年の大津波も到達せず安全だった所にある倉庫の前に耕運機を置いた。すでにその周辺には多くの人たちが津波を見ようと集まっていた。俺は昭和8年の津波はかすかな記憶だけある。35年のチリ地震津波は早朝から日中だったので目撃した。

いろいろな角度から海を見ていた人が、「津波が来た！」と大声を発した。だが、誰一人として恐怖と緊張のあまり、その声に応じられなかった。第1波、第2波と防潮堤に大激突。その響きと同時に防潮堤の高さの何倍にも立ち上る水柱と飛沫。防潮堤を軽々と乗り越え、高所から落下するというより、大きく口を開いて襲い来るテレビ漫画の怪獣のようだ。明治、昭和8年の闇

の中を襲来した津波とは雲泥の差。今度のように津波の実態を見た人は少ないと聞いている。俺は安全と思われる場所にいたが、2波、3波が急激に来襲したので、皆でさらに高い方へ移動した。長靴を履いていてよかったが、足元をさらう津波の流れはとても強く、津波そのもののエネルギーを感じた。何とか津波から脱出したが、いろいろ大事な物を詰め込んでいた倉庫が、再三にわたって襲う大津波に耐えられず、目の前で大破。中身を何も残さずに流失した。ひどく落胆して帰途に着いた。

数日後、被災の興奮覚めやらない中、親しい友人と出会ってお互いの健在を祝した。危機一髪の体験を聞いたが、もしこの津波が明治や昭和8年のように夜間に来ていたらと思うとぞっとする。こうして津波を乗り越え、皆と話ができるのも、神仏の御加護と、古老の方々や祖父母の語った津波の教訓のおかげだ。彼らは異口同音に「大地震の後には必ず津波が来る」。その時には何も持たずに誰よりも早く、高い所へ逃げよという。

人は自然を征服しようとして堤防を築いたが、できなかった。「人は、人を征服できるが、自然はできない」ことを見せ付けられた。まさに自然の脅威である。

息子を待ちわびた一本道

大浦婦人会長　阿部秋子（55歳）

【大浦】　7

4日ぶりに22歳の息子に会えました。

町までの町道は、5、6メートルにも及ぶ漁具や船、一瞬にして剥ぎ取られた私たちの財産で寸断され、山を一つ越えないと確かな情報が得られなくなりました。山越えをしてわが家を目指して帰ってくる人たち。

私は山に向かうように新たにできた一本道で、息子を待ち続けました。息子もわが家を目指して歩いていると信じて……。疲れと余震の恐怖、そして寒風の中、悔しさと、「もしや」と思う悲しみで身体が崩れそうに痛くても、母としてそうせずにはいられませんでした。

山から下がって来る米粒くらいの人影を涙目に見つけては、足元のぬかるみに足を取られながら、声を掛けながら走りました。

「どこから帰ったの？　ほかはどんな？　どんなになっているの？」

顔なじみの彼は表情を変えることなく、淡々と、自分が歩いて来た道々の悲惨さ、その目に焼き付くこの世のものとは思えぬ光景を語ってくれました。息子より二つ年下の彼は「おばちゃーん」とただただ抱きつき、泣きじゃくりました。私は息子のことなど聞くことができなくなり、

「母さんはあなたの帰りを待っているし、家は大丈夫だからね。早く顔を見せて安心させてあげて」と言いました。彼の母親の喜ぶ姿と、自分が息子と会えた時の姿が重なって涙が止まりませんでした。彼の体の温もりも、息子の温もりと重なりました。

その後、避難所で食事の支度をしている時に「おかあー」と息子から肩をたたかれました。被災後、何回か、いや何千回も「返して、私から息子を奪わないで」と願っていたので、私は思わず声高く名前を呼び、自分の心に素直に、人目をはばかることなく泣きました。その晩、叔母の家の2階で息子と床を並べて寝ました。

息子は、かろうじて生き残った人は内陸方面に避難したという誤った情報を耳にし、夫と私を探していたと、穏やかな重い口調で話してくれました。闇の中、息子の布団のふくらみを横目で見ながら冷え切った身体を丸めて、息子の心に包まれ眠りに入りました。朝方、息子のザックの中の衣類をたたみ返しました。手探りでたたみ返しました。夢も希望も吸い取られてしまった気持ちから抜け出し、初めて闇の中でも充分に幸せを感じました。

今まで、幸せを求め、道に迷ったり、挫折したり、思えば物に惑わされ、欲張りすぎていたかも……。いつも幸せはちゃんと隣にいてくれていたのです。

その後、じきに町道が開通してからは、その道を通ることはなくなりました。息子を待ちわびて苦しかった時の心境に触れたくなかったし、嫌な思い出は忘れなければ生活できなかったから、その道を見るだけでも気が滅入りました。

それからまた春が来て桜の散るころ、勇気を出してその道を歩いてみました。急に涙が出て止まりませんでした。あの時は自分の足音を耳にしながら、下を向き、落ちる涙をぬぐいながら、顔を上げると、迫るようにあの山々が見えました。

私は道に咲いたタンポポを摘み、しばらくじっと立ち止まっていました。その時、背後からあの時の自分の足音が軽やかに私のそばを通りすぎて行った気がしました。振り返ると、海はまぶしいほど光り輝き、どこまでも広く穏やかでした。

自然の大きさの中で「生かされている」と肌で感じ、亡き友の名をつぶやきながら帰りを急ぎました。

「明日へ向かって」第1集

父の教訓を語り継いで

【大浦】 8

小林かき子（61歳）

東日本大震災で多くを失った苦しみや悲しみは、いまだ癒えることはありませんが、知り合えた多くの方からの支えがあって今日があることに深く感謝しています。

あの日の大地震は、突然に大きく地球の底から突き上げられているようでした。ドンドンと強い地鳴りと建物のきしむ音、天窓や蛍光灯が天井から落ちて来るようで、揺れは収まるどころかだんだん強くなります。こんな地震は生まれて初めてで、ただごとではないと感じました。「大地震の後は逃げる間もなく大津波が来るものだ」との言葉が頭をよぎり、避難の行動を起こすことができたものと思います。

高台に避難している最中、山火事は広がり、炎で空は真っ赤になり、すぐそばまで来る恐怖を感じて、地区の避難所へ移動しました。着の身着のままで、ただただ寒さを我慢し耐えている時、避難所の近所の方々が毛布や衣類を届けてくださいました。そのセーターを着た時の暖かさ。今まで張り詰めていたものが解け、涙が止まりませんでした。

避難所での生活は、震災前の生活とは一変しました。寒く凍った長い道を水くみに通い、重いバケツを両手に持って帰り着いた時には水が半分ほどしか残っていなかったり、寒くて眠れなかったりとつらい事もありました。少しの物も皆で分け合ったり、家族同様に声を掛け合ったりの共同生活だったので、乗り越えられたのでしょう。今では思い出ともなっています。

いつも平凡で当たり前の生活の一つ一つが至福の時である事を強く感じています。あの突然の大地震の時に、明治生まれだった父の次の言葉がよみがえります。

「地震が来たら出入り口の戸を開けておかないと、戸がゆがむなどして出られなくなる」

「地震の後は津波が逃げる間もなくすぐに来るから、どこにいても道なりではなく、山をめがけて逃げろ」

「どんな大事な物でも絶対に取りに戻るものでない」

父は折に触れ私たちに諭していたものでした。予報だけにとらわれず、自分たちの肌身で感じ得た事を言い伝えていた大切さを感じています。大地震、大津波、火事、原発事故と、この大震災は戦争のようなありさまでした。

失った多くのものを取り戻すことは大変困難ですが、支えてくださった皆様に感謝を忘れず、二度とこのような大災害時にも犠牲者を出さないように次世代の一人一人の胸にとどめ、いざという時、身を守る行動ができるよう語り継いでいきたいものだと思います。

「明日へ向かって」第2集

悲しみも感謝の心も忘れない　【大浦】9

瀧磯一美（すくいそひとみ）（46歳）

突然、大きな音と大きな揺れ、書棚からはファイルが飛び出し、机の上の物が滑り落ち、バチンと音を立てて電気が消えた。自宅に電話をかけたが既につながらない。

まさか二度とこの場所に戻って来ることができなくなるなんて思うはずもなく、散らかった書類を片付けて私は八幡町の職場を出た。

車に乗るとワンセグ放送で津波の到達時刻が目に入った。「もう間に合わない」と自宅に帰るのを諦め、他の車につられるように役場駐車場までたどり着いた。それから、あの恐ろしい津波が街に襲いかかった。家族はそれぞれ安全な場所にいると信じていた。けれど、自分は無事でここにいると伝えることができない。どうにもできないまま辺りは暗くなっていった。

次々と聞こえてくる爆発音、燃え上がる街、火は役場付近まで迫って来た。私は真夜中に山田北小学校まで歩いて避難し、そこで朝を待った。翌朝、宮古から何とか帰って来たという人と一緒に、中学生が避難している山田高校へ行き、無事に子供たちと会うことができた。そのまま馬指野（まさしの）の義姉の家に世話になり、自宅に戻ったのは4日目の午後だった。

義姉の家にいる間、大浦は山火事が民家の近くに迫っていて、住民は遠野にヘリで避難するなどの情報もあったが、空からの消火活動により、火災からは守られた。日々明らかになってくる巨大津波による被害の大きさ、死者、行方不明者、原発事故、目の前に広がる惨状、帰らない大切な人たち。毎日泣いてばかりだった。そんな中、多くの支援物資やメッセージが毎日届けられ、世界中の人が私たちを応援してくれていると感じた。「がんばろう東北」「がんばろう山田」の言葉を目に、耳にしただけで胸がいっぱいになった。

2年を過ぎた今も、そしてこれから先も、あの悲しみ、つらさを忘れない。感謝の気持ちも忘れない。

自身の家族の事を案じつつ、子供たちを守ってくださった学校の先生方、電気を、水を、電話

を、一日も早く復旧させようと必死に作業をしてくださった人たち。汗とほこりにまみれながらも、被災地のために働いてくださった全国各地の警察、自衛隊、消防、ボランティアの方々に感謝したい。

「復旧・復興がなかなか進まない」とつい不満を口にしてしまうけれど、世界中の人たちにたくさん助けられ、支えられていることを胸に、私たちも未来に向かって努力していかなければと思う。

「明日へ向かって」第2集

傾聴活動の幅を広げたい

【大浦】10

横田章子（73歳）

大津波が来た日の事は、いくら語っても語り尽くせない、一人一人いろいろなドラマがあったと思います。恐らく、一人一人の心に、深く深く残っていることでしょう。

今日の海はますます青く、何事もなかったかのように広くゆったりとしています。あれから、町では復興に向けて全町民が協力して取り組んでいます。たくさんの支援を頂き、感謝でいっぱいです。

私は幸い家も家族も無事でした。「家がある人たちはいいよね」。そんな言葉に申し訳ない気持ちになったりもしましたが、卑屈にならず、いつも応援して明るい言葉に変えてまいりました。仮設に落ち着いたとはいえ、まだまだ不安を抱えておられる人々に対して、今、私に何ができるかを考えております。

入院している人たちが相手の傾聴ボランティアを以前からしておりましたが、仮設に住んでいる人たちにも目を向けて、私にできる事から始めようと思っております。悩んでいる人のお話をよく聴いてあげようと思っています。心の底に眠っている自覚しなかった思いや願いに気付いて、プラス思考が湧くように心を開いてあげられれば最高なのですが、なかなかそこまで到達しません。失敗の連続です。

けれども何度かお会いしているうちに、「心のもやが晴れたよ」と言ってくださった時はうれしかったです。でしゃばらず控えめに、いつも寄り添って見守っております。どうぞ、家が残っている人たちも応援しているのだと、常に心に置いてください。そして、一日も早く自分らしい生活を取り戻すことを願ってやみません。

「明日へ向かって」第2集